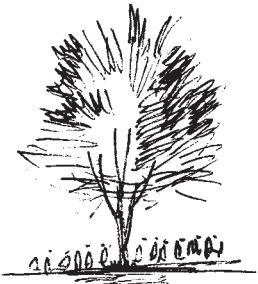


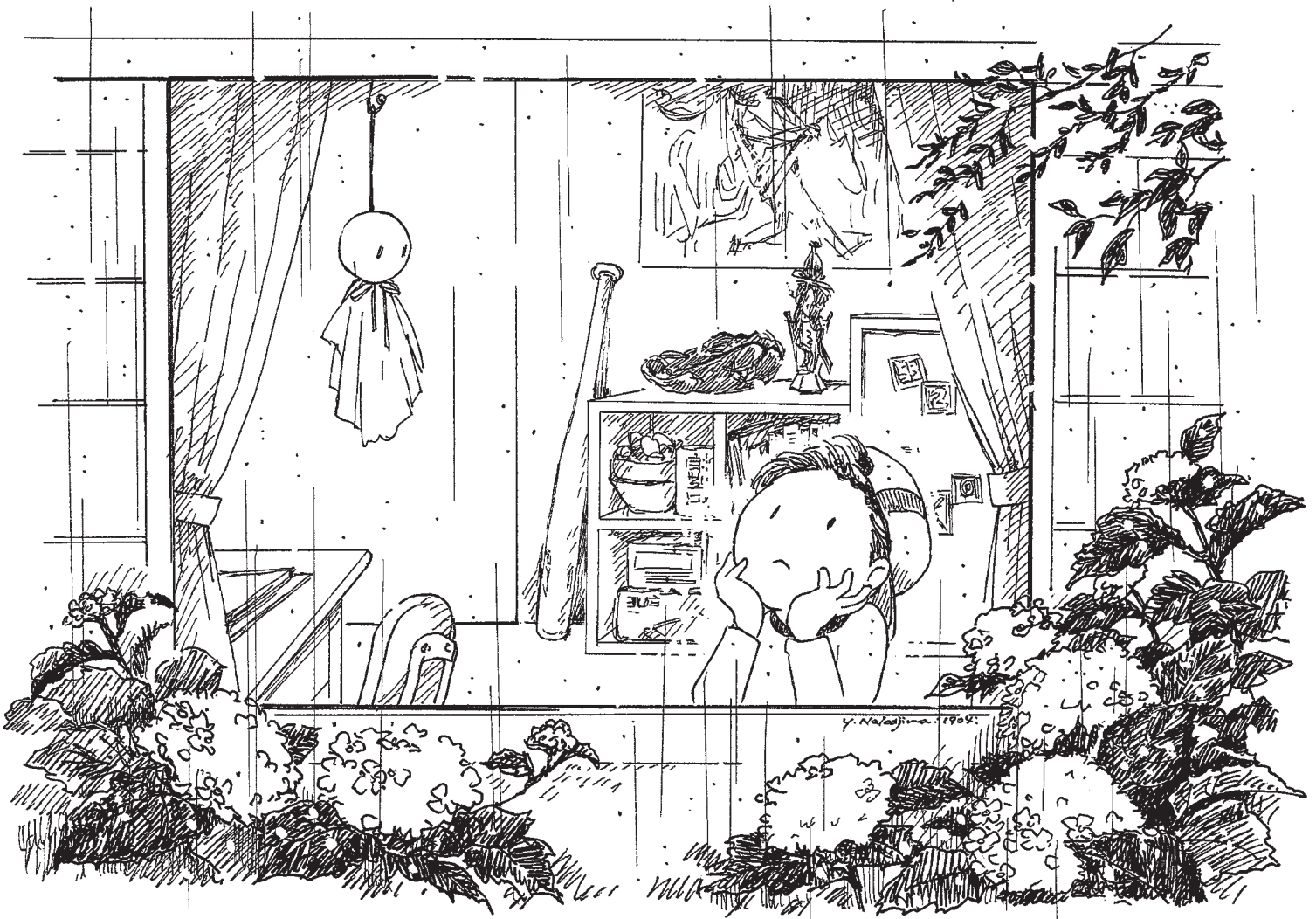
ひかりのこ

光の子



No.190 2019.5.29

●年間聖句 人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。
(マタイによる福音書7章12節より)



「てるてる坊主に願いを込めて」

表紙絵・中島由起子

※今号の俳句は休載します。

発行／社会福祉法人 光の子どもの家 TEL／0480-72-3883 FAX／72-6649 振替／00130-1-128022
編集／光の子 編集委員会 e-mail:hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp 〒349-1155 加須市砂原277 印刷／株式会社エール・アートデザイン
HPアドレス／hikarinokodomoie.com

新年度を迎えて

施設長 竹花 信恵

殺伐としたニュースが続く
中、光の子どもの家も何とか
新年度を迎えることができま
した。新緑のまぶしさに癒さ
れます。新たな環境に慣れ、
子どもたちは早くも日焼け顔
で、心は夏休みに飛んでいる
ようです。私たちもほっと一
息つきたいところですが、
日々新たな課題が目の前に現
れます。

このところ、ご家族等関係
者から怒りをぶつけられる場
面が続いてしまいました。子
どもに会いたただけなのにど
うしてだめなんだ、うちの子
どもがいじめられているので
はないか、どうしてこちらの
行事に子どもを出さなければ
ならないんだ等。
可能な限り丁寧な対応を心
掛け、家族と協力して子ども
を育てるという理念に何の変
わりもないのに、この数か月
続いています。話しあって誤
解を解き、笑顔をとりもどせ

たこともあるし、いまだやり
取り真最中の家族もいます。
こちらも足りないところだら
けであることは事実です。気
を付けているはずがいつの間
にか肩の位置が高すぎた場面
もあるかもしれません。怒り
の表現のみに目を向け真意を
見落とすことがないように、
ご指摘、ご意見として謙虚に
受け取ることが基本です。

その状況から「怒り」とい
う感情について考えさせられ
ることが増えました。誰かに
ぶつけないければ消えない感情
なのかもしれません。これま
で重い困難を抱え、大変な状
況に悩みながら、精一杯生き
ていらつしやった証なのでし
ょう。子どもを想う心の表れ
として受けとめ、子どもの利
益や、子ども自身の願いにつ
なげることができるかどうか
か、それだけを願って今後を
考えていきたいと思えます。
そう思っていたとき、ある

ご家族から電話がありました。
た。ここを出たあとのほうが
居た時よりずっと長い卒園生
の父からです。話を聞くこと
ぐらいしか自分にはできませ
んと言つて、お会いすること
にしました。にもかかわら
ず、強引な依頼をされたこと
に対して、私は気持ちが悪
着かず、これまでの様々な事
柄が湧き出て怒りの感情を意
識しました。

怒りを批判していた自分が
こんな簡単に怒りの感情を
もつことに呆然としました。
自己覚知、自身を見つめるこ
となしに人と接する仕事はで
きないことを改めて思い知ら
されました。

怒りに飲み込まれるのでは
なく、うれしい、悲しい、寂
しい、楽しい、と様々な感情
が豊かに表出できる、気持ち
を伝えあえる生活を今年度も
めざしていきたいと思いま
す。それは子どもたちが示し
てくれています。自分が施設
で暮らさなければならぬこ
とになった原因をつくつたす
べてに怒りを抱えているに違
いない子どもたちが、それを
超えてあんなに笑顔を見せて

くれていることに何より教え
られます。

この春は幼児5名、小学生
11名、中学生7名、高校生以
上10名でスタートいたしました。
た。社会人となったメンパー
は、少しずつ慣れてきた様子
が伝わってきます。それ以上
の「若者たち」もたびたび顔
を出してくれそうです。

また職員もひとり加わって
くれました。どのように仲間
に加わっていたかどうか事前に
職員で話し合った時、「居る
だけでいい」と言わないで、
「こういうことをするとい
い」と具体的に伝えようと話
ができました。「居るだけでい
い」と言われてここにきて35
年、自分もそれしかできず、
それしか言わず日々を重ねて
きました。そんな話し合いひ
とつに次への可能性を感じさ
せてもらっています。これか
らも変えていくこと、変えて
はいけないところを見極めな
がら歩んでまいります。今年
度もどうぞよろしくお願い
いたします。

宇宙に想いを寄せながら

老健施設みゆきの丘施設長 仙道 富士郎

数学と物理が苦手である。「医者でそれはないだろう」という声が聞こえる。しかし、少なくとも、私たちが学んだ医学は、数学と物理が出来なくとも、大丈夫だった。基礎医学の一つである「電気生理学」などは、物理が出来なくて、話にならないし、その道の専門家は、数学や物理に長けているが、医学一般に両者は必須ではない（と私は思ってきた）。

なぜ数学と物理が不得意なのか、ありていに言えば、その方面の頭が悪いということになる。自己弁護のために二言言わせてもらえば、数学に關しては、計算力が抜群に弱いことが一つの理由である。数学の計算だけではなくて、具体的な物事を、順序立てて、きちっと仕上げることで、まるで駄目である。大雑把なことを考えて、後のDetailは他人にやってもらっ

て、世の中を生きてきたということになる。物理に關しては、高校の時の教師の授業がひどくつまらなくて、大学入試の受験科目に物理を取らなかつたことが、物理嫌いを助長した。

ところが、ここ数年、宇宙もののエッセイに凝っている。宇宙の学問と言えば宇宙物理学が基本で、物理に疎い人間は、宇宙の事を語る資格がないことは、重々承知している。確かに、最初は、物理学の式が出てきて閉口したが、何回か付き合っているうちに、少しずつ理解できるようになってきた。そもそも人間なのだが、宇宙の話はとも理屈っぽい。ここまでは理論で説明できるし、観察でも実証されているが、その先は不明である、というよう

な、限定を付けた話で事が満たされていて、世事のよう

に、何ら限定も無しに、そうかもしれないし、そうではないかもしれないというような話はない。

宇宙についての著作を読む前は、ブラックホールなど聞くと、なにか胡散臭いような感じがしたが、現在ではなるほどと思わされるまでになつてしまつた。と、思つていたら、なんとごく最近、ブラックホールは映像としてテレビに映し出された。また、現在の宇宙の始まりにおいて、瞬時にとんでもないエネルギーの生成が起こつたということも、理論だけではなく、実験宇宙物理学における観察によつて実証されるようになってきたところが凄いと思う。

宇宙もののエッセイを読むようになって、思考の基礎として最も疑問視するようになってきたことは「常識」である。宇宙は、我々がなんとなく信じてきた、いわゆる常識とはかけ離れた事どもによつて満たされているようだ。つまりところ、常識とは我々が生かされてこの時間における出来事を規範とする考え方であるわけだ

が、宇宙の成り立ちを考えると、今ここで起きていることは、過去には起きなかつたものも多くあり、また未来には起こらない可能性の方が大きいと言えよう。宇宙の最大の特徴は、動いて、変わつていくということだから。

最近読んだ宇宙もののエッセイで、138億年前に誕生した現在の宇宙のほかにも宇宙が存在する可能性があることが、書かれていた。そんなことが、SF小説ではなく、科学的な読み物として書かれていることが、なぜか嬉しい。また、NASA（米国防航空宇宙局）が毎日インターネットで発表しているSpace.comのなかで、「2千億個も存在する現宇宙の星の中に、地球と同じように、高度な知的機能を備えた生物の存在している星がないと推定する方がおかしい」みたいなことを述べていた。宇宙人の話は、そこまで来ているのである。今の話を聞いて「とうとう認知症になつたか」といま思われた方も多かるう。そうではない。もし認知症になつたとしたら、私ではなく、NASAで

ある。
宇宙のことを気に掛けるようになって、大きく変化したことは、気分がゆったりしてきたことである。もちろん、毎日世事に振り回されている生活ではあるが、世事に悩まされてふさぎこむようなこと

音楽を聴く

彫刻家 中島 睦雄

は無くなった。なにせ、宇宙のことときたら、桁が一兆くらい違うのだ。悩んだって仕方ないという思いが先に立つ。そして、なぜか、生きていることが楽しくなってくる。

のは、実に恵まれていたと言うのである。「先生には厳しく指導されながら、少しずつ向上を目指して努力しています。これは、大変幸運な事ですよ」とTさんは言う。

私は、冗談に聞いた事がある。「ザ・ダンデイズ」に入れてもらうには、面接があるんでしようね。私なんか面接の段階で落とされてしまうんでしようね。全然ダンディじゃあないから」と言う。「いやいや、誰でも入れますよ」との事。それは、歌い続ける事によつてダンディになつていく、という事か。

しかし私は、歌のグループに入ろうとはしない。音楽を聴くのは好きだけど。

そこで、オースドックスの歌を歌い続けるTさんに、聞いてみた。

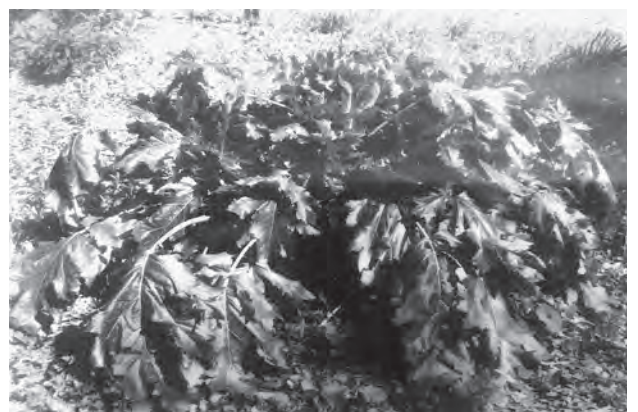
「ところでTさん、昔の軍歌なんか知っていますか？」と。すると「知っていますよ」と。すると「勝つてくるぞと勇ましく 誓つて国を出たか

うか……」なんてね」
そのあたりは、私も知っている。なにしろ大東亜戦争の

先日、先輩のTさんと車で走っている時、CDで音楽を聴いていた。「カラヤンによる不滅のポピュラー名曲」というものであった。
或る曲の所へきた時、Tさんが言った。「あつ、これはモルダウだよ」と。「そう、スメタナ作曲のモルダウですよ」と答える。そこでTさんは続けた。「今度のコンサートで、これも歌うんですよ。合唱なので、今、練習に励んでいるんですよ」と。
Tさんは、男性合唱団「ザ・ダンデイズ」というグループで歌っている。これ

は、かつて、ヨーロッパでオペラデビューし、国際コンクールなどで幾つもの賞を獲っているソプラノ歌手だが、現在はフリーに活動している素晴らしい指導者。
この方の指導の下で、現在混声合唱を続けているということであった。
Tさんは「私は、歌があつたので人生を楽しく過ごせましたよ」と言う。
会社の仕事から離れた時に、合唱グループの存在を知り、そこへ入れてもらったという訳である。その会で、ずっと20数年も歌って来られた

終末が、私が、小学校、いや当時は国民学校だったが、3年生の時だから、軍歌は覚えただけであった。その頃は外国語は禁止とかで、ドレミファソラシドというのを、ハニホヘトイロハとかに置き換えていたように思う。したがって「ハニニホホニ ホホトト イイト」などと歌つたものがある。
今では考えられないような歌も教科書で教わつたんだらうと思う。当時の戦争という状況の中で作られた歌なので、子どもたちは何の疑問も持たずに歌っていたのであつ



前189号の話で扱ったアカンサスです

た。
 そんな子ども時代を過ごしてきた私もTさんも、戦後の流行歌、艶歌なども、自然に受け入れて歌っていたものがある。

美空ひばりの歌や、石原裕次郎の歌など、カラオケなどで歌う機会はあった。

それに、唱歌や童謡なども聴く機会も歌う機会もあった。特に、下総皖一という優れた音楽家の顕彰に関係する会に入っていると、唱歌や童謡を歌う機会も、聴く機会も多いのである。

しかし、じっくりと味わい深く心に響く音楽となると、私の個人的な好みでは、西洋のクラシック音楽や、その流れによる曲が多い。

Tさんと一緒に聴いたモルダウも、クラシック音楽のロマン派と言われるあたりの作品だろうと思う。

したがって、最近の飛んだり跳ねたりしながらの歌には、どうも馴染めないのである。

共育ちカンガルー日記(52)

ミニ・コーチ

近藤 みちる

「今度は優希がミニ・コーチになって、お母さんに背泳ぎを教えてあげるね」
 スイミングの進級テストで背泳ぎのテストに合格した優希は、いかにも得意げに言った。

ミニ・コーチとは、以前、私が自らにつけた呼び名である。当時、優希はスクールに入校して2年が経っていたが、一向に水面への顔つけが出来ず、水慣れクラスから昇級できないままでいた。何か突破口が必要だと、コーチも考えたのだから。ある時「お母さんが優希ちゃんにお手本を見せてあげたらどうかしら」と提案され、私は優希とお揃いのゴーグルを調達し、優希を連れて市民プールへと足を運んだ。

「母さん、ミニ・コーチだからね」。私はプールに降りて優希と向かい合い、少しず

つ水面に顔を沈めながら、まづ口でブクブク息を吐いてみせた。次に鼻からブクブク息を吐いて徐々に顔を沈めていき、頭のとっぺんまで水に沈んでみせた。

コーチにわざわざ「ミニ」と付けたのには訳がある。私は決して泳ぎが得意なわけではない。泳げるのはクロールだけだし、それも25メートルがやっとというところである。だが意外にも「泳ぎが得意でないお母さんでも出来る？」ということが、優希の中に根強くあつた苦手意識というハードルを、ぐんと引き下げたようだった。あれほど頑なに拒んでいた顔つけを、優希は私の目の前であっけない程すんなりとやってのけたのである。ひとたび水に顔をつけてしまえば、鼻ブク、水中ジャンプも訳なくクリアし、次のテストで優希は初め

て合格点をもらい、進級を果たしたのだった。

それからは進級テストが近づいたたびに、私はミニ・コーチとして優希を市民プールに連れて行くようになった。我が家には、元水泳部で鳴らしたパパもいた。だがその頃の優希がミニ・コーチに選んだのは、私の方だった。優希が必要としていたのはコーチというよりもライバルで、蹴伸び、バタ足、息継ぎなど、レッスンで本物のコーチに教わった項目を私と競うかのように何度も何度も繰り返し、進級テストに備えるようになった。テストでは結果に一喜一憂し、特に不合格だった時には、誰よりも悔しがるようにもなった。どこをどう直せば合格できるのかと、自らコーチに教えを乞う姿も見られるようになっていった。

優希がこれほど進級に拘るようになったのには、お友達の間にも大きいように思う。以前、スケジュール調整のためスイミングの曜日を変更しようとしたことがあったのだが、その時優希は「曜日を变えたらAちゃんと会えなく

なつちやうから、絶対に変えないで！」と頑なに言い張った。聞けばAちゃんは、中級コースの赤帽子になって出会った子だと言う。更衣室から先には、親も立ち入ることのない子ども同士の世界があつて、学校も年齢も住んでいる地域もまちまちな子ども達の中で、優希が親の介在無しに、初めて自分で作ったお友達が出来た。Aちゃんだったので、そのAちゃんに会いたい、一緒に進級したい、という思いが、いつしか優希のモチベーションになっていたのだろう。

さてミニ・コーチの方はというと、実はもうとつとつにクロールで優希に追いつけなくなつてしまい、今では専らパパが自主練の相手を担っている。その甲斐あつて優希は背泳ぎのテストも合格し、目下、平泳ぎの特訓中である。ハードルを下げてやらないことには一歩も前に進めなかった、あの臆病で頑なな優希は、もうプールにはいない。優希はときどき私をプールに誘ってくれる。パパとの練習の合間に私のもとにやつて

来て、今度は優希がミニ・コーチになつて、私に背泳ぎを教えてくれる。あの優希から、こうして泳ぎを教わる日が来ようとは、夢にも思わなかつた元ミニ・コーチなのである。

とはなんと幸せなことだろうか。これもまた親心というもののだろうか。悠々と前を泳ぐ優希を追いかけながら、ふと私は、また優希に一本とられたような気がして、思わず苦笑したものである。

春の夜や

星の名を子に教はつて

みちる

現場から..アフターケア① 周平

副施設長 小西 剛史

数年前、光の子どもの家を卒園した後、福島県の小さな村の温泉施設に就職した周平。新生活へ向けた出発の際には元担当の田口と共に大宮駅の新幹線ホームまで見送りに行きましたが、結局会えないまま電車が出発してしまふ……というドタバタなスタートでした。

そしてその新しい生活拠点、森に囲まれた小さな集落に佇むその温泉施設周辺には娯楽施設などはほとんどありません。22時閉店のコンビニエンスストアが1軒、小学校と中学校が1校ずつ、他は小さな中華料理屋や居酒屋、民宿、床屋などが数軒ある程度。休日といつても平屋建ての社宅で一人ゴロゴロ、テレビを観たりゲームをしたりして過ごす日々がほとんどだったようです。酒を飲むこともなく、パチンコなどギャンブルに興じることもなく、サッカーくらいしかこれと言った趣味がなかった周平にとって

は日々の生活がとても長い時間を感じたことでしょう。人付き合いが決して得意ではなかつた周平のために、片道3時間をかけて年に2、3回程こちらから温泉施設へ訪問し仕事の様子を伺つたり、休みの日に合わせて食事などに連れて行つたりしました。また周平の方からも仕事明けの夜中に翌日の休みを利用して光の子どもの家に車でやつてくるのが何度もありました。そんな生活もやがて限界が訪れます。「俺、福島の仕事を辞めて埼玉に戻ろうと思つている。やつぱり光の子どもの家近くの慣れ親しんだ土地で暮らしたい」といふ連絡が2年目の夏ごろから頻繁に入るようになり、とうとう年度を区切りにして実際に退職、引っ越しをすることになりました。

福島最後の日、こちらで手配したワゴン車に、そこで過ごした2年分の生活用品を詰め込みます。乗り切らなかつた自転車のみは近所のご家族へ譲り、小雪がちらつく村を

現場から…アフターケア②

次郎

副施設長 穴水 祐介

私鉄の始発駅からほど近い住宅地にある我が家には、地の利便性からか卒園後様々な理由で仕事や住居を失った青年たちが、少しの間やっかいになりたいたいと頼みにくる。

初めは少しの間と言いつつ長期になる者がほとんどなのが、5人以上の青年が我が家でレスパイトをして再び自立していった。その第1号である次郎の話をしてみたい。

彼は4歳の時、父子家庭で養育困難として入所。小学2年生から始めた剣道では、持ち前の運動神経を発揮し、高校では国体の予備選手に選ばれたが、椎間板ヘルニアを患い2年生で剣道部を退部。燃え尽き症候群を心配したが充実した高校生活をすごした。進路は、色々迷った結果新聞奨学生として観光関係の専門学校で学ぶ。当時、児童養護施設の高校退所者の奨学金制度は充実しておらず、光

の子どもの家でも現在のようになかった。そのため、上級学校に進学するには新聞奨学生しか選択肢がなかったのである。

彼の数年前に、光の子どもが家で初めての新聞奨学生が大学と専門学校に進学したが、仕事と学校との両立が成り立たず、1年生の後期からは学校には行けなくなってしまう。

先輩たちの進路選択の反省もあり、次郎には新聞奨学生の大変さを伝えた。必ず卒業するとの強い決意から進学を応援することになる。

専門学校の友人の助けもあり、宣言どおり2年間で卒業し都内の老舗ホテルに就職する。採用試験の時には親権者である父との関係もなくなっていたため、次郎からの相談を受けて何度か会社の人事担当まで説明に出向いたこと

があった。

就職後は様々なサービスキ、度々充実して働かせていただいている姿が想像できる連絡があった。このまま順調にホテルマンとして生きていくのかと安心していた数年がたった頃、「この先の展望がみえてこなくなった」と突然退職を決意。その後「穴水さんの家で生活させてほしい」と依頼があり承諾、1年弱派遣社員をしながらいくつかの資格の勉強をして、選んだ仕事は前職の経験を活かしたレストランの仕事だった。

再就職を機に自立、アパートを見つけて仕事も順調にスタートアップした頃に以前からお付き合いしていた方と結婚。今までたくさんの苦勞をしてきた次郎に末永く幸せになつてほしいと願っていたが、お互い仕事で忙しく数年後生活のすれ違いを理由に別居。ふたりの間には子どもがいなかったため「別居したい」と相談があった時には君たちがそう決めたのなら反対はしないと伝えた。

30歳代後半となった次郎

は、以前にも増して仕事に打ち込み、多忙な毎日を過ごしている。毎年大晦日になると自社の高価なおせちセットが送られてくる。

今では以前のように頻繁ではなくなったが、人生の岐路に迷った時に「どうしたらいいか」と相談がある。よくよく話を聞くと彼の心の内は決まっている。ほとんどの場合、次郎が決心したようにやってみなと応えている。

先日「名古屋の新規事業店の責任者として異動になったから」と連絡があった。「おめでとう。よかったね。そつちには親戚が多いから立ち寄るから」と話し励ましの言葉を贈った。

次郎の場合は本人の能力が高かったこともあり自己実現はできているが、児童養護施設を卒園した青年たちの多くは根本的にセルフイメージが低く、社会生活をおくる上でかなりの生きづらさを抱えている。それゆえ今日、児童養護施設が担わなければならぬ役目として、アフターケアの比重が大きくなってきている。



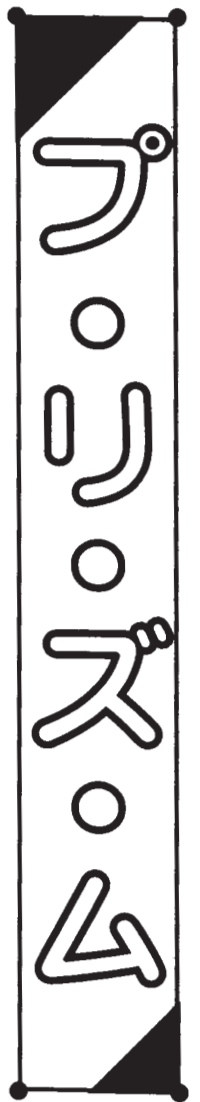
☆4月2日
ノエビアグリーン財団のご招待で、ヘリコプター搭乗体験をしました。当初は都内周遊の予定でしたが、お計らいで光の子どもの家の上空を飛んでいたいただきました。東京ヘリポートから片道20分！
グーグルマップより最新の航空写真です。



☆埼玉西武ライオンズ球団より子ども用のグローブをいただきました。なぜか両手にはめていきます。

//// ———— 反 射 光 ———— ////

読みやすい誌面を目指してリニユールを試みました。文字を大きく、周辺の余白を削って行間を広げ、長い記事も1ページに詰め込まずに、自然に次のページへ送る構成をとっています。今後は写真や子どもの絵を織り交ぜて、より潤いのあるビジュアルにしたいと思います▼5月18日の理事会をもって、施設創設から走り続けてきた菅原哲男が理事長を退きました。後任の理事長は、東大宮教会の教会員として光の子どもの家を支え、10年からは法人監事を務めてきた大高晋一郎です▼穴水と小西が副施設長に就任しました。今まで通り子どもと生活を共にしながら、竹花施設長と力を出し合い、施設運営の中核を担っていきます▼光の子どもの家は「子どものための子どもの施設」であり続けるために、今後も試行錯誤を続けてまいります。子どもだけでなく、職員も毎年成長できるよう心掛けます。皆様の引き続き、そして更なるご支援を、よろしくお願いいたします。
(義)



原田家

遠藤 恵里香

新小学4年生の凛は、4月1日になったとたん、自分で布団とパジャマを畳むようになりました（感動！）

昨年、私が「布団を畳んでいきなさい！」と注意すると、凛は「4年生になったらやるから!!」と宣言。敷きっぱなしの脱ぎっぱなしで登校する日々が続いていました。宣言なんてすっかり無かったことにしているだろうと思いきや、きちんと覚えていたばかりでなく、パジャマまで畳むようになるなんて……。しかも今のところ、毎日欠かすことなく続けています。今年度は、子どもたちの発言を信じて、やる気がわいてくるような言葉かけができるよう、心がけていきたいと思っています!!

佐藤家

池田 祐子

佐藤家の豪規（3歳）は幼稚園に入園しました。

昨年10月に光の子どもの家へやってきて以来、生活にも慣れ、たちまち皆の人気者になりました。

アンパンマンが大好きで、佐俣に作ってもらった「ローリボン」をくるくるくるくるの回し、「ローラー」とローリボンになりきっています。ちよつとでも近づこうものなら、「えいつ」と、ローリボンでハタかれ、やつつけられてしまいます。

言葉も少しずつ、ハッキリしてきました。私が豪規に「しずかにしてね」など注意すると、「うるさい！」と、ばいきんまんのせりふを叫びます。

そう、豪規の言葉の先生は、アニメのアンパンマンなのです。登場キャラクターのせりふを場面に合わせて見事

に使いこなしています。

ただ、子どもはあまり言わないだろう言い方をする事もありです。ある日、田口に「たかこさんは、アンパンマンみるかい？」と豪規が言いました。「その言い方は、もしやジャムおじさん！」と田口と私はひざを打ちました。やつぱり楽しい豪規です。

できることが少しずつ増えてきました。幼稚園に入ってから、時間をみてトイレへ連れて行くことができるようになりました。

朝、制服に着替える際、「ひいーん」と泣くこともありましたが、年長、年中組の先輩たちと幼稚園バスに乗り、がんばって通っています。

帰ってきた豪規に「幼稚園楽しかった？」ときくと、「ハイ！」と、元気に答えまします。「何が楽しかった？」ときいても、「ハイ！」と元気に答える豪規です。

少しは幼稚園にも慣れてきたかな、と感じ始めたころ、豪規は家族の出身国へ帰る事になりました。突然のことに子どもたちも大人も驚きました。

「アンパンマン見られるかな？」「大好きなチョコをたくん食べられるかな？」と心配してくれるやさしい子どもたち、かわいがってくれた大人たちに見送られ、豪規は旅立ちました。気軽に会いには行けない遠いところです。どうか元気に幸せに育っていつてほしい、と願うばかりです。

仙道家

岩崎 まり子

仙道家の新年度は、新たに2名が加わり9名の子どもたちとスタートしました。

小学4年生の礼君は昨年度末に入所したばかりのニューフェイスです。

児相の担当ワーカーからは

「自己表現できない」「言葉を選んで対応してあげて欲しい」と言われていました。

確かに入所当日の礼君は、こちらから何か質問をする

「ああ。それはね……。どっちでもいい」

と伏目がちに答え、とても繊細な印象でした。小柄な体型と相まってとても傷つきやすい、そして傷ついてきた様子が伝わってきました。

入所2日目にして本領発揮という感じなのか

「てめえ、ぶつ殺すぞ！マジで！」

「ふざけんじゃねえ！」

に始まり、新学期が始まると

「(宿題は)絶対やらない！やりたくない！」

「(明日の支度は)やりたくない！お前がやればいいだろ！」

という毎日で、私たちは、

「あの時の繊細そうな印象は何だったんだらうねえ」と話しつつ、ちよつと安心したりしています。

今年度もいろいろな困難があるでしょうが、楽しみながら乗り越えられるように頑張りたいと思います。

倉澤家

倉澤 智子

新年度が始まりました。倉澤家は昨年度と同じ子ども4人で、比較的落ちついたスタートとなりました。

うち2人は高校を卒業し、千和は社会人に、幸子はこれからの生活のために充電中です。瑠璃は高2、萌愛は高1に。というところで全員が高校生以上となりました。

この春から、今までスマホを所持していなかった2人も持つことに。もちろん便利なだけでなく、使い方によっては危険がいっぱいなので制限つきですが、スマホを手にしたばかりの2人は新しいオモチャを手にした幼児のようにスマホに夢中です。LINEのアイコンを日に何回も変更したり、家の中にいる他のメンバーとスマホを介してやりとりしたり。

全員がそれぞれに自分の部屋でYouTubeや音楽を楽しんでいのか、テレビを観ることも少なくなりました。夜のダイニングに担当者がポツンということも。「○がテレビを独占してる！」

「○○ちゃんばっかり！」という苦情はまったく聞こえなくなり、一見平和な生活に見えますが、超アナログ派の担当者としては、こんな生活でいいの？と思うこともしばしば。何でもLINEで済ませるのではなく、大事なことや言いにくいことほど、顔を合わせて直接話をしよう……。という倉澤家ルールで、何とか今の状況を乗り越えたいと思っています。

お酒のように毒にも薬にもなるスマホ。危険から子どもたちを守り、スマホ以外でコミュニケーションをとることが今年度の大きな目標になりそうです。

牧野家

関根 裕介

子どもたちにとって平成最後の春休み。以前から釣りに行きたいと言っていた伊織と日向には、会うたびに「釣りに連れてって」「いつ行けるの」と言われていました。なかなか予定が合いませんでしたが、1日空けられたので、さっそくはなさき水上公園に連れて行くことになりました。

た。夏はプールとして使われているところが、冬は釣り堀になっっています。

エサをつけていざ釣り開始。なかなかウキが反応しない。「ちよつとあげてみようか」やっぱりエサだけとられていた。またつけて再開。ヒット!!立派なニジマスが釣れました。その後は調子よく連れて計6匹。2人も楽しそうに釣りをしていました。

楽しい時間もあっという間に過ぎ、家に持ち帰ってから魚をさばき、担当の牧野さんにおいしく作ってもらいました。

「おいしかったよ、また連れてって」と言ってくれたので、こちらもうれしい気持ちになりました。子どもたちには、これからもいろいろな経験をさせてあげ、大人になつた時にすこしでいいので役に立ててもらえたらなと思っています。そんな春休みの一日でした。

お知らせとお詫びと訂正

「光の子」187号にてバザーの日程を6月8日予定と掲載していましたが、正しくは6月1日です。確認不足でした。お詫び申し上げます。

光の子どもの家バザー実行委員会

今年のクリスマスツリー作りは、ラミネートフィルム (A3) と透明折り紙を大量に使う予定です。ご提供いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

クリスマスツリー制作担当 黒川

©Toshinori Mori 2015

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2019年2月～4月

2019年4月現在

幼児5名 小学生11名 中学生7名 高校生8名
他2名 計33名

2月

- 8日 東大宮教会の久保島泰牧師による夕礼拝 感謝
- 15日 東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝
- 20日 藤岡孝志氏による施設内研修 感謝
2月生まれの誕生日会
- 22日 守谷教会の若月健悟牧師による職員礼拝 感謝
いただいたお雛様を食堂に飾る

28日 通報避難訓練

3月

- 8日 守谷教会の若月健悟牧師による職員礼拝 感謝
高校合格祝い会
- 16日 出発(たびだち)の会
18歳を迎えた4名がそれぞれの道へ
- 21日 ダンサーの高橋万里さんによるダンスパフォーマンス 感謝
- 22日 東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝

23日 3月生まれの誕生日会

第120回理事会と評議委員会

28日 温泉同好会、子どもの健康診断

4月

- 2日 ノエビアグリーン財団によるヘリコプター搭乗体験 感謝
- 3日 コイズミ照明様がいらして寄贈くださった学習机を子どもと組み立てる 感謝

4日 仙道家、佐藤家、原田家、権現堂の花見へ

5日 進級進学祝い

13日 4月生まれの誕生日会

19日 東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝

20日 光の子どもの家後援会、しずくの会とのバザー打ち合わせ

光の子どもの家後援会総会 感謝

26日 守谷教会の若月健悟牧師による夕礼拝 感謝

〈寄贈者各位〉

株式会社青木組 カーブス古河店 カーブス大利根店
カーブス羽生店 (株)なとり 高橋会計事務所
大塚東一 阿久津農園 藤沼畜産 長谷川雅之
松本明子 (株)ユーグリッド・エージェンシー
ダスカジャパン・クアウテモック 杉山和俊
戸石幸男 しずくの会 石井喜久子 山本英美子
染谷すみ子 マルキチ物産 芹沢美保
コイズミ照明(株) 柏崎龍男 割烹酒田 井上高明
堀江営雄 他多数の皆様

〈ボランティア各位〉

岡本有代 山田智 山田裕子 山田義人 常松洋介
佐俣 向井進 加藤瑠海 山中拝 幾島学
他多数の皆様

子どもたちは新しい環境で頑張っています。

皆様のご支援に感謝します☆ (黒川)